

NPO法人しろおい創造空間「蔵」創設記念日特別シンポジウム ～白老の創造的な可能性を考える～



2000年のオープン以来、文化・芸術・社会教育に関する事業への取り組みを重ね、2021年には新しいメンバーを迎えて新体制となった「蔵」が11月3日、『白老から世界へ、世界から白老へ—ポスト・コロナ時代のまちと文化創造—』と題したシンポジウムを開催。会場には約50人、オンライン視聴者約70人が参加しました。同法人の毛笠史寛理事長は「蔵のクラウドファンディングの反響の大きさを通して文化・芸術の大切さを改めて感じました。これからもわくわくするようなものを創っていききたい。何でもいから蔵を活用してください」とあいさつしました。

第1部はウポポイ、観光業者の3者のパネリストが白老の可能性について語り、第2部は「白老で生まれたクリエイティビティ」とし、彫刻や音楽、映像、食の地元の若きクリエイター4人が白老との関わりや活動の源についてトークを展開しました。



▶野本正博さん（民族共生象徴空間「ウポポイ」運営本部・文化振興部長/旧アイヌ民族博物館館長）
野本さんは、旧民博の歴史をたどりながら、ポロト湖畔の独自性、固有性を強調しました。その象徴としてコタンコルクル像が一番インパクトがあったと思うとしていました。「アイヌ文化の一番いいところは創造性。これを“見える化”して伝え、世界と向き合う時の指針としていければ」と将来を語りました。



▶佐々木史郎さん（国立アイヌ民族博物館館長）

佐々木さんは同博物館が白老にできるまでの経緯を改めて紹介。その中で「白老がふさわしい、となったのはやはり旧民博の存在が決定的だったと思う」と話しました。ウポポイについては「アイヌ民族の人たちが、白老の人たちがみんな気軽に使うことで価値が生まれる」と持論を紹介しました。



▶相内学さん（星野リゾート北海道統括総支配人）

星野リゾートは白老町とパートナーシップ協定を結び、来年1月14日にはポロト湖畔に温泉宿「界ポロト」をオープンします。相内さんは「地域を盛り上げていきたい」と話し、「一点突破でコンセプトを決め、体験価値の創造、認知度・意向度を最大化するために常に新ネタを発掘し発信を継続したい」と思いを語りました。

若きクリエイターらが白老愛を語る



左から

中谷公祐さん（広告プランナー）

西尾圭史さん（ブランチジェリーニシオ オーナー）

さっちゃん（大学生）

国松希根太さん（アーティスト）

国松さんは旧飛生小校舎跡を活用してさまざまなアーティストが制作活動に取り組む飛生アートコミュニティの代表。創作拠点をつくるまでの思いや森づくり、芸術祭、町内会との交流を紹介し、「土地が持っている力を感じます」と語っていました。「創作活動にとって場所の確保は重要。時間はかかるが地元町内会などの理解や支援がないと長くつづかないと思います」。

第2部の前にギターとピアノの弾き語りで作作曲をサプライズ披露したさっちゃんは現在、函館の大学生。シンガーソングライターとしての活動の原点は「蔵」での初ライブという。「私は新しい場所に行ってもやっぱり育ててくれた白老に根付いていると思う」と白老愛満開。白老のまちづくりの課題として「大学生ぐらいの世代の穴をいかに埋めていけるか、かな」と。

奥さんの地元の白老に移住してきた西尾さんはパン職人の立場から参加。「丸ごと北海道のパンが好評です。白老には良い水がありますので。また現店舗の外観も白老の森を意識した外観にしました」と白老の自然を絶賛。「私も9年目。アクションを示していかなければならないと思っています。ちょっとしたまちの小さなピースを伝えられれば」。白老の課題は「(魅力の) 強いものがいっぱい。ただそれがまとまっていない気がします」。

中谷さんは映画やCMの制作・企画会社（東京）の広告プランナーだが、白老生まれの白老育ち。「白老の日常の中にどれだけ魅力的なものが詰まっているのか」と、数々の思い出を熱っぽく語りました。「ただ、ここ10年前ぐらい前から白老に元気がなかった気がします。今、自分たちが貢献しなきゃと思っています」。「白老の人たちがもっと誇りを持って、今の自分が幸せなんだと思ってほしい。いいまちになる予感がします」と締めくくっていました。